

英賀は燃えているか

Is Aaga Burning?

姫路城は姫路平野ほぼ中央部に位置しているので、海からは少し離れています。そのため、近世には飾磨津を姫路城の外港とするために、城下と津を結ぶ水路の整備が急がれました。それが三左衛門堀であり、船場川です。飾磨津が整備される以前には、英賀（あが：姫路市飾磨区）が外港だったとの意見があります。この意見に導かれ、近世姫路城築城前後の英賀に関して眺めてみます。

さて、播磨地域は地理的条件により、戦国時代の後半には毛利氏の影響力が及んできていました。西へ拡大する織田氏と毛利氏の衝突は時間の問題であり、播磨は拮抗する両勢力圏の境界が漸移する地域でもありました。英賀は毛利勢の播磨における拠点の港です（英賀城とも言われますが、史料上では英賀と書かれることが多く、英賀本徳寺を中心とした寺内町であった）。結果的に毛利方の息のかかった連中は駆逐されていくのですが、支援していた毛利側にしてみれば「兎角、播州衆ハ役ニこそ立間敷」（『萩藩閥閥録』、『兵庫県史』史料編中世九）きものと認識されていました。

此競を以て直に阿賀へ取懸けられ候処、藝州へ人質出だし置き候者共、舟に取乗り罷退く。然る間一戦に及ばず、阿賀の寺内へ打入り、羽柴筑前守此表の様跡見計らひ、御堂へ筑前守人数入れ置き百姓共呼出し、知行差出等申付け、姫路に至って人数打納る。（『信長公記』）

毛利方へ人質を出している者たちは舟でとつと逃げ出しています。役に立たない播州衆が英賀寺内にも詰めていたのでしょう、秀吉軍は抵抗も受けず英賀寺内に侵攻。「御堂」＝本徳寺に軍勢を駐屯させて領民には指出を命令し、反抗がないことを確信したのか、軍勢を姫路に撤退させました（天正8<1580>年）。

ところが、こうした記述とは正反対の内容を記す史料、『英城日記』（以下、日記）が地元が存在します。それを引用して紹介した文章があります（有馬成甫「英賀城阻に就いて」『軍事史研究』4-2）。

斯くて諸方面に於て激しき戦岡が行はれ、花々しい功名を挙ぐるものもあつた。特に城主の嗣三木安明は年十八歳で勇猛比なく、敵六十三人を討取つたと記して居る。而して秀吉は力戦多大の犠牲を払うを認め、森ノ口守将に通じて和議開城せんことを計つた。（略）通秋、安明は秀吉に従ふを肯ぜずあくまで戦ふことを主張したが、森ノ口の五名は秀吉に款を通じ此口より攻破られ（略）多くの将領は本丸、二の丸にて討死をしたが、通秋、安明は漸く切り抜けて筑前に落延び、城内は一面の火災となって殆ど総ての人家重宝等焼亡した。

『信長公記』では英賀において目立った戦闘行為があつたことが読み取れないのに対し、日記では圧倒的多数の秀吉軍に対して一時的に有利な戦況ではあつたものの、内部の裏切りによって秀吉軍が城内に乱入して英賀城のほとんどの武将が戦死し、城主の三木通秋・安明は九州へ逃亡、城内は焦土と化したというのです。

それぞれの立場で記述内容に相違が生ずるのは当然としても、共通の出来事であるはずの戦闘について、全く正反対の記述になることには注意しておく必要があります。「利生護国寺文書」（『紀伊続風土記』）では「又口賀へ直相働海之手より乗込悪逆人をハ或は追失過半町人百姓等をハ助置姫路山下へ召寄市場を立させ申候事」とみえますので、何らかの戦闘行為はあつたようですが、「過半町人百姓等をハ助置」いたのですから、英賀が壊滅するような破壊を受けたとは思えません。

秀吉軍による英賀焼亡の話は、日記以外の史料では見かけないものです。一方、『信長公記』については、それを裏付けられそうな他の史料があります。

懇令啓候、仍来三月廿一日至紀州表可令出馬候、然者、先度如申候、御分國中諸浦警固船事、不残被仰付、廿一日二至泉州岸和田表着船、尤候、御人数并水主以下兵糧米事、播州英賀二候而可申付候間、被書付可承候、尚進々可申候、謹言

二月十三日

小早川左衛門佐殿

秀吉（花押）

（前掲『兵庫縣史』）

天正13年、秀吉の要請で紀伊へ軍船を出動させた小早川隆景に対し、兵士や水主に英賀で兵糧米を支給するという内容です。英賀陥落から5年も経つので町は復興したといえればそれまでですが、灰燼に帰した港町を軍船の物資供給中継地として使用するものでしょうか。天正11年7月11日には、英賀の橋善海が秀吉に京極茄子という大名物を進上しています（「天王寺屋会記」）。善海は三木通武のことと考えられ、その名前から、日記に記された三木通秋・安明の一族と思われまふ。本徳寺の亀山移転（天正10年）をもって英賀は終焉したとする見方もあります（永島福太郎「播州英賀津と英賀衆」『兵庫県の歴史』25）。本徳寺移転で寺内町が終焉したとみるのは首肯できるものの、大名物をいまだに保有できる三木氏の存在は、英賀が経済的に機能する町としては終焉を迎えていなかったとみるべきでしょう。寺内町ではなくなっても、港町としての機能は善海らによって維持されていたのではないのでしょうか。でもそう言うと、かつて本徳寺跡から出土した炭化米は英賀が焼滅した証拠ではないのか、との反論が出そうです。確かに寺跡からは焼けた米や瓦片が出土しています（「文化財見学シリーズ3」姫路市教育委員会文化課。但し、考古学的には未検証）。

その点に関連して、「英賀之由緒」（三木善永氏所蔵）と表書のある文書（以下、由緒）に興味深い記述があります。

（略）其時分ハ休把病死仕候残之者共至後隨申候付人五拾石宛知行被下置候、然ル処ニ内ヨリ火ヲ懸焼申由皆天正八庚辰年破申候、其後御蔵所ニ成申由石川伊賀守様・同掃部様と申御代官御座候て慶長六丑年ニ御城立申答之由ニ御座候共 池田三左衛門様姫路へ御入国と成ニ付御城立申儀相止り申由申伝候（略）

この記事から、①井野休把（安明の子）死後、英賀は秀吉側に付き、一人当たり（日記での長衆カ）50石の知行宛行、②内部からの放火で天正8年に英賀は「破れ」た、③英賀は「御蔵所」となり、石川（いしこ）光重・一宗が代官となる、④慶長6（1601）年、石川は英賀に築城する計画だったが、池田輝政の姫路入城によって頓挫、という経緯が由緒作成当時には伝聞されていたことがわかります。そして、築城予定だった敷地の規模（本丸・二ノ丸・堀）を書上げ、そこが「中浜村前城之内と申候所也」との注記もあります。

ここで興味深いのは、秀吉側近の石川光重・一宗が代官を務める直轄地・英賀で築城を計画しているところです。すなわち、石川氏は他に播磨国内で代官をしていたことがわかっていますし、秀吉が側近に寺内町を与えて一向宗寺院の政治的権力を否定し、在地の有力者を下代とするという河内で行った一向宗対策（寺沢光世「秀吉の側近六人衆と石川光重」『日本歴史』586）と轍を一にしている点です。

天正8年以降、英賀は史料上あまり見られなくなりますが、その後の九州遠征や朝鮮出兵という戦争では、山陽道は上方からの重要な兵站線となります。小豆島が小西立佐の管理下に置かれたことはその証左になるでしょう。室津（たつの市）や鶴（太子町）といった場所にも石川の影が見えます。その延長線上で、英賀寺内に代官として光重らが配置されたと考えることは許されるでしょう。彼らには、放火や本徳寺移転で荒廃した英賀に城を築き、城下町として再編する目論見があつたかもしれません。

由緒の記述には不可解な点もあるので、鵜呑みにすることは慎まねばなりません。天正8～10年の寺内町解体から、寺内町が近世村落になるまでの空白の歴史を、この由緒が一部でも埋めてくれる可能性はあると思われまふ。石川氏の存在は、英賀だけでなく、近世初期の播磨地域の研究を進める上でも注目すべき情報といえるでしょう（光重の子光元は、関ヶ原合戦時まで龍野城主）。

もし、英賀に城が築かれていたら、姫路や飾磨津はどんな町になっていたのでしょうか。

<参考文献：城郭談話会『図説近畿中世城郭事典』同会、2004年所収、「英賀」の項>

